

韓国薬学研修報告

高田 ゆうき

5年 12A082

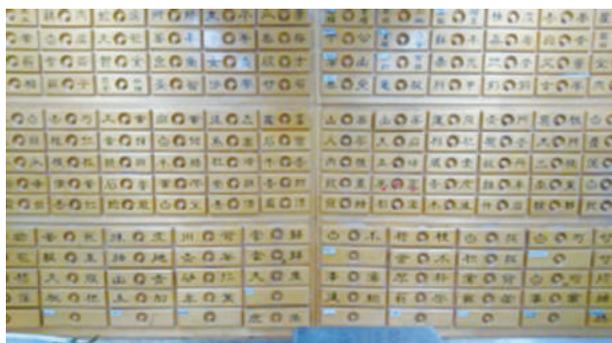
私たちは、2016年8月17日～20日の4日間、韓国へ訪れ、国際交流をさせていただきました。

東国大学ソウルキャンパス見学、韓方市場、韓方博物館見学などにも行ったが、東国大学付属病院の薬剤部、門前薬局について報告する。

<東国大学付属病院薬剤部>

韓国では、西洋医学と韓方医学の医師・薬剤師免許が異なるので、東国大学付属病院の薬剤部は、日本と同じような西洋薬が置いてある薬剤部と韓方を扱う薬剤部では異なる場所にあった。

1Fの入院患者用の西洋薬の薬剤部では、処方せんが紙として患者さんの手元に渡ることではなく、医師が作成した処方せんがオンラインで薬剤部に送られ、薬剤部でラベルを印刷し、監査が始まる。DI室は調剤室の隣にあり、いつでも調剤をしている薬剤師と連絡がとれる雰囲気だった。



これは、調剤薬局についても言えることだが、日本では内服薬は多くの場合、PTPシートで投薬されるが、韓国はじめ、海外の多くの国では一包化して渡される方が多いため、調剤室でPTPシートの薬が占める割合は少なく、一包化の大きな機械の割合が多いように感じた。そのため、薬の在庫置き場には機械に入りきらない瓶に入ったバラ錠が多くみられた。また、PTPシートで在庫管理されている薬もそのまま患者さんに渡すことは少なく、一包化の機械にセットして、使うことが多いそうだ。

12Fの韓方を扱うフロアでは、私たちが伺った際は、顔面神経麻痺の患者さんの光線治療を行っていた。これは、赤外線血管拡張作用で血流を良くする治療だ。韓方薬局では、たくさんの機械を使って、生薬から薬を煎じたり、粉碎したり、丸めたりしていた。この様々な工程を行う部屋は湿度や温度を一定に管理できるところで、設備が整っていた。

<門前薬局>

東国大学付属病院の向かい側にある門前薬局に行かせていただいた。

韓国にはお薬手帳は存在せず、患者さんのデータがオンラインで管理されているので、パソコン上で監査を行っていた。重複投与があれば、パソコン上で薬剤師にわかるようになっていて、その処方が長期投与のためにたくさん出ているのか、他科受診による重複投与のかなどは薬剤師が判断する。

この調剤薬局の処方せんの90%は東国大学付属病院



のもので、日本ほど外来処方が多くないようで、全体では100件/日だそうです。

OTCや健康食品も置かれていた。最近では、日本のOTC薬の取り扱いが増えている傾向にあるようだ。総合病院の門前なので、さまざまな科の処方を取り扱っていて、薬は800～900種類置いてあるが、よく使うものが500～600種類そろっていた。大学病院がジェネリック医薬品をあまり使わない傾向にあるため、先発品を多く置いていた。散剤は設備が必要になるので、種類は少なかった。



<感想>

今回の韓国研修では、韓国と日本の薬剤師そのものや、薬剤部・薬局のシステムの違いについて学ぶことができた。やはり、一番驚いたのは、韓方医学と西洋医学を明確に分けていることだった。私が質問したところ、患者さんは韓方医学だけ、西洋医学だけ、といった患者さんもいるし、どちらも併用している患者さんもいるとのことだった。このシステムについて考えるうちに、どのように患者さんは医師を選ぶのか、分離することでどのようなメリット・デメリットがあるのかなどたくさんの疑問が出てきた。研修自体は終わったかもしれないが、自分自身でこれから調べてみようと思う。また、この研修で得られたことはそれだけでなく、韓国の学生の方がとても準備をしてくださり、当日も私たちを先導していただいたりして、食事の時間や自由時間を満喫することができた。来日していただいたときも、学生同士で過ごす時間がたくさんあり、お互い携帯の辞書を片手に片言の韓国語、日本語、英語が飛び交い、コミュニケーションをとった。実際に言いたいことが伝わっているか、くみ取れたかはわからないが、また日本に来た際は連絡してくれるそうで、こちらも韓国に行ったときは会おうと約束することができた。薬剤師という同じ目標を持つ者同士、今回の国際交流で韓国でも日本でも楽しい時間を過ごすことができてよかったと思う。

最後に、私たちに貴重な機会を与えていただいた関係者の皆様に厚く感謝申し上げます。